

山口市医師会女性医師部会記念講演会印象記 『『ご縁』を大切に『志』を忘れずに『自分らしく』』

竹本 成子

平成29年度山口市医師会女性医師部会総会後、記念講演として、大阪府立病院機構・大阪母子医療センター副院長の位田忍先生から、「『ご縁』を大切に『志』を忘れずに『自分らしく』」と題するお話を伺いました。

講師の位田忍先生は、山口県のご出身で、幼稚園から高校まで山口市で過ごされ、我が山口高校の大先輩でいらっしゃいました。

現在もお母様が山口にお住まいで、その主治医が、田村博子先生と言うご縁でこのほど来山され、ご講演いただくことになりました。

位田先生はご本人が幼き頃に、主治医をしていただいていた故田原暁先生に憧れ、小児科への道を選ばれたそうです。大阪大学医学部へと進学されたのは西宮市で独居されていたお祖母様の近くに居たいと思われたからとか。その後のご活躍を思うと、何かに導かれたような人生の選択、まさにご縁があつてのことかと思われます。

先生は学生の頃から、『こどもを大きく育てる』ことにご興味がおありだったそうで、ご卒業後は、大阪大学の小児科の栄養消化器内分泌の研究室に入局され、小児の栄養と成長について研究に勤しまれておられます。その成果の一つとして、小児用高カロリー輸液（プレアミンP）の組成決定に携われたと伺いました。

先生の旦那様は国際法がご専門の大学の先生ということで、ご結婚後、旦那様の海外勤務（フランス）にもついて行かれたそうです。研究の継続を条件として、教授の許しを得たとおっしゃっていましたが、しっかり基礎研究をなさりつつ、ちゃっかり（失礼しました）お子様にも恵まれておられる！慣れない土地での仕事に加え、出産、育児まで、なんと素晴らしいバイタリティー!!!外国で、誰の援助もない中での出産には、旦那様が立ち会われたそうです。このことが、旦那様の「父性の誕生」につながり、親子関係の構築に多大な寄与があったそうです。「今、振り返るとこの渡仏中の2年間で家庭の基盤を築けたことが良かった」とおっしゃっていました。帰国後からフルタイムで仕事を再開され、現在まで精力的にお仕事に取り組

んでおられます。先生は様々な方の力を借りつつ、子育てを乗り切ったとお話されていました。一方で、仕事を継続できたのは、常に小児の栄養と成長の研究という志を忘れず、積極的に自分らしく動きつづけてこられたからこそと感じられました。

今回のご講演のサブタイトルは『小児の栄養と成長』で、お仕事にちなんだお話も伺えました。

小児の成長（発育・発達）には栄養の役割は非常に大切であるということ、また、子供は本来受動的で病状あるいは状況を改善しようにも自分から訴え出るとか自立することはできず、改善はなかなか困難であるということを強調されていました。

身長、体重、性成熟、いずれの発育にも不足と過剰があり、その中でも、低身長、肥満、低体重についてお話いただきました。

小児の低身長は慢性栄養障害のサイン、低体重は急性栄養障害のサインとのこと。慢性栄養障害、飽食の日本で？ですが、PFC比（摂取カロリーに対するProtein、Fat、Carbohydrateの構成比率、15:25:60が理想）が大事というお話です。また、これらを効率よく利用するために成長ホルモンやIGF-1の分泌が大切です。これには睡眠が強く関連します。厚生労働省が提唱する「早寝早起き朝ごはん」運動は小児の発育に大切で理にかなったものといえるようです。

次に、小児の肥満についての話題です。年間10%以上の体重増加は生活習慣病合併の予備軍となるそうです。高度肥満児の状況は複雑で、食べざるをえない心理状態や家庭環境があり、そういった負のスパイラルから肥満の増悪につながっていくということです。治療については、医療、福祉、教育などの社会が介入によって、状況の立ち直りを図り支えていく必要があるとのこと。

次に体重増加不良についての話題です。乳児の体重増加不良の原因は養育過誤が24%（20年前は10%）、食道逆流24%、ミルクアレルギー24%とのこと。診療では、心身の状態、病気の有無の他に、養育過誤の危険兆候に注意を払いつつ、即入院（養育者からの分離）か、外来で

のカロリー摂取指導を行うかを判断するそうです。分離入院になる場合、児童相談所などの福祉、教育機関との連携、養育者（多くは母親）へのアプローチはどうするかと問題は様々です。

『小さく産んで大きく育てる』の間違いについて、低出生体重児の話題です。

妊娠時、出産時ともに母体に負担が少なく、産後の体型戻しも楽なので、妊娠中、母親の体重を増やさず、赤ちゃんを“小さく産む”ほうがよいというイメージをもっている一般人も多いようです。また、妊婦中の体重管理産を婦人科で指導されるため、“体重を増やさなければそれに越したことはない”と考え、過度の対応をしてしまうのも不思議ではないかもしれません。

しかし、妊娠中に母親の体重を増やさない＝母体が低栄養になると、胎児も低栄養になり、胎児の儉約遺伝子が発現されるそうです。結果、低出生体重児は、日本の標準的な状況では、誕生後の栄養が過剰となり、肥満に陥りやすくなり、成人後虚血性心疾患の発症率が高くなるそうです。肥満は生活習慣病の温床ですから、他にも2型糖尿病、本態性高血圧症、メタボリックシンドローム、脳梗塞、脂質異常症、血液凝固能の亢進などとの関係が研究されています。

また、神経系＝脳を守るために腎臓の発達が犠牲になるそうです。胎児の時のネフロン数が少ないため、学齢期で普通の児童より腎機能が悪い状態に陥るようです。

早産児では脂肪細胞の数が少なく、出生後体重を増やすためには脂肪細胞の肥大化に頼ることになり、脂肪細胞機能の異常を起こし、さら

に肥満につながることになるそうです。

戦後の経済成長とともに増加を続けていた平均出生体重が1975年をピークに減少に転じ、2000年には戦前を下回る水準になっているそうです。他の先進国で女性の体格向上に伴い出生体重もだんだんと増えているのに対し、日本では減っているらしく、これも『小さく産んで大きく育てる』信仰のなせる業、プラス、早産が増えていることとも関係があり、高齢出産が増えていることと無縁ではないそうです。

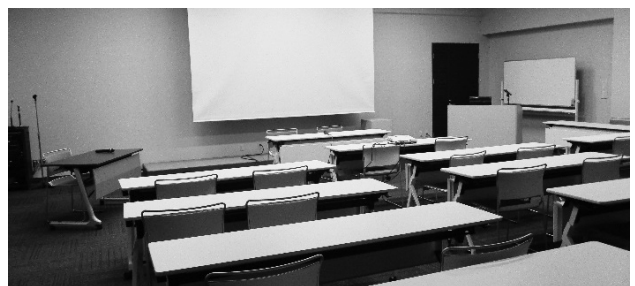
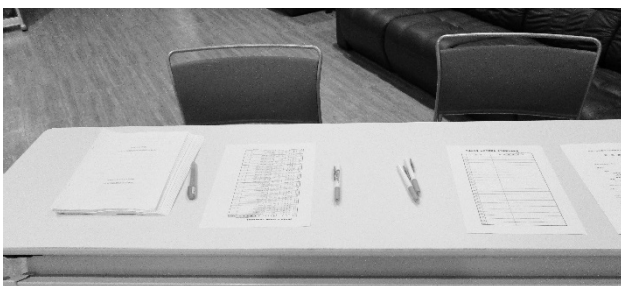
健康な赤ちゃんを産み、育てるために、適齢期の方々へ、また将来適齢期を迎えるの方々へ情報を発信していかなければならないなと思うのでした。

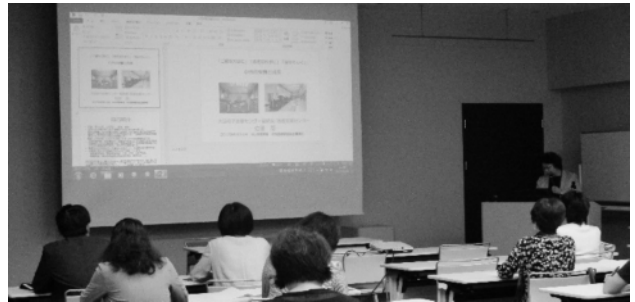
最後に先生の好きな言葉を紹介されました。『a spoon-full sugar helps medicine go down』helpsではなくmakesとおっしゃっていたかもしれません。

映画「メリー・ポピンズ」の主題歌です。ご存じの方も多いと思いますが、私は知りませんでした。早速ググってみますと、歌詞全体も知ることができました。『やらねばならないお仕事にも楽しみはある、楽しみを見つけて、〜〜、ほんの一匙の砂糖があれば苦い薬も飲めるのよ、』なんと素敵なお歌詞でしょう！毎朝、子供の支度におおわらわの私としては、子供を起こす前にこの歌詞を囁み締めることにいたします。

さて、女性医師部会は細々ながらも地道に活動を続けております。まだ未参加の女性医師の方々、講演会にご興味をもたれた男性医師の方々、是非一度ご参加くださいますよう、今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

乱文、遅筆ご容赦のほどお願ひいたします。





自己紹介

- ・ 竹田 忍 (いだ しのぶ) 旧姓 金矢
- ・ 生まれは下関小月ですが1歳前から山口市で育ちました。
- ・ 野田幼稚園、山太付備小学校、中学校、山口高校と通い山口高校77期生で、医学部は大阪大で1977年卒です。(当時母方の祖母が西宮市で一人でしたので阪大を受験した)
- ・ 医師(小児科医)になろうと思ったきっかけは田原晴先生です。
- ・ 小児科専門医、医学博士で、現職は大阪府のこども病院である大阪母子医療センターの副院長です。新研修制度で、小児科専門医研修プログラムの基幹病院であり、プログラム責任者です。
- ・ 実家は山口市白石に一人暮らしの母がいて、主治医は田村博子先生
- ・ 幼馴染の何人かが医者になり山口で活躍しています。
田原卓浩先生、野村幸治先生、大城(木村)三枝子先生、
尼崎先生、徳山中央病院の内田正志先生、藤田先生、、、

山口市は日本で一番人口の少ない県庁所在地ですが、誇り高くそして優しい気質を備えた街で、ここで育ったこと、そして今年若い母を見守っていただいていることに、いつも感謝しています。